

---

# 偉人パラダイス

野球人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

偉人パラダイス

### 【Nコード】

N3301Z

### 【作者名】

野球人

### 【あらすじ】

俺、杉下<sup>すぎした</sup>勇人<sup>ゆうと</sup>は高校1年。いろいろな理由が重なり織田の先祖と同居している。親もいなければそこまで特別に親しい友人もいない。次々に現れる歴史的有名人の子孫を相手にするのは予想以上に辛かった……。

## 『先祖』

1話 『先祖』

君たちは昔の偉人たちを知っているだろうか？この人たちがいなければ今のこの世はないだろう。

俺の名前は杉下<sup>すぎした</sup>勇人、偉人の話をしているが別に俺の先祖が偉人というわけではない。

「ちよつとー！ 勇人まだ？」

「少し待てよ……」

こいつの話をするためにこの話をした。こいつは織田<sup>おだ</sup>美長<sup>みなが</sup>少々めずらしい名前だがこれは歴史的有名人、織田信長の子孫で信長から1文字とつたらしい。

「遅いなー！ 学校に遅れるじゃない！」

「悪い悪い……」

「帰りに何かおごりなさいよ！」

「なんでそうなる……」

信長の性格を受け継いでいるのかけっこうせつかちだ……。しかしホントに時間がギリギリだ。

「急ぐか、遅刻する」

「だから最初からそう言ってるじゃない！」

……朝からうるせーな

なんとか学校に間に合い、朝のHR<sup>ホームルーム</sup>が終わった。ちなみに俺たちは高校1年、大東<sup>だいとう</sup>高校に通っている。

「今日もギリギリね。ホント進歩なし……」

ため息交じりに言ってきたのは豊臣<sup>とよとみ</sup>実理<sup>みのり</sup>、織田の次は豊臣だ。さすがに今は昔の家来の関係はないし、親友ぐらいの仲良さだ。

「あつ！ 実理〜！」

「おはよう、美長」

2人の話を聞きつつ俺は帰りになにをおごらされるのか・・・と考  
えていた。

特に今日は何も無く学校が終わり、いつもどおり美長と家へ向かっ  
ていた。ちなみに俺たちは俗に言う  
幼馴染というやつだ。

「さすがに少し寒くなってきたね〜」  
と美長が言い出したので俺も答える。

「そうだなあ、さすがに10月、もうすぐ11月だからな」  
そろそろ夏服しまつて冬服にしなきゃだな〜

「・・・勇人？」

考えていた俺を美長が見ている。っていうかこいつ小さいなあ〜、  
150cmあるか？ぐらいだし・・・知ってたけど。

「こ、今度は何ジロジロ見てんのよ」

「いや〜、美長はやっぱり小さ・・・」  
ドガ！

「ぐっ!？」

いきなり俺の腹部に激痛が走った。なにごと!？

「小さくて悪かったわね！」

美長はなぜか怒ってしまった。身長が低いことを気にしてたっけ？  
というか身長のこと言ったのになぜ胸を手で覆っているんだ？

まだ痛む腹をかばいつつ帰宅。

「ただいまあ〜」

と俺。

「ただいま〜」

と美長。なぜ美長がただいまなのかは、深い、深い、ふか〜い事情  
があるのだ。で結局俺と美長は

『同居』という形になっている。このことがクラスの連中にバれる  
と少々、というか普通にやっかいだ。

この織田、性格はあれだが見た目は・・・まあ俺が言うのもなんだがすごくかわいい。普通にそこの雑誌に載っているモデルよりかわいい。小さいからキレイというよりかわいいのがいいと思う。

「ねえ勇人、今日のご飯何？」

「ん？今日は・・・何がいい？」

「まあ何かはわかってるけど・・・」

「グラタンがいいな！」

「はいはい・・・」

「やっぱり・・・こいつに聞くと絶対『グラタン』だ。」

「早く作ってよ！」

ちなみに家事は全て俺がやっている。さすがにもう高1なので洗濯物ぐらいいは自分でやってほしいんだが・・・

もう一つ。美長の家事スキルは0に等しい。前にゆで卵を作らせたら電子レンジが大爆発を起こした。

なぜレンジなのは予想がつくだろう・・・

俺がグラタンを作っている間、美長はと言うと・・・自由そのものだ。好きなTVを見たり、ゲームをしたりと遊んでいる。まあそっちのほうで静かでもいいんだけどな。

そろそろできるから食器などを美長に用意してもらおう。

「お〜い美長、そろそろできるから準備して・・・？」

「スースー・・・」

美長のやつ寝てるし・・・。こいつ寝るとホント美少女だなあ。

・・・何も言わなかったらけど。

などと考えていたら・・・

「ん〜、ふあ〜」

かわいいあくびと共に美長が起きた。そして俺の顔を見ている。

「・・・何よ」

急にしゃべられたので俺はびっくりして・・・

「い、いやなにも・・・じゃなくて！夕食できたぞ？」

しかしずっと一緒に住んでたからあんまりわからなかったけど、最近美長つて急に女っぽくなったよな・・・

胸のほうはまだただけど・・・

「ふっ！」

「ぐはっ！」

いきなり溜め0のフックを俺に決めてきた。なんだ!?

「な、なんだよ・・・」

「いやらしい目でどこ見てんのよ・・・?」

少し顔を赤らめてこっちを見ている。俺ってそんなにいやらしい目をしてますかね?

「どこも見てねーよ!それより早く食卓につけ」

「うん」

はあ、さっさと食べよ・・・

食べてる間、美長と今日あったこと・・・と言ってもほとんど同じ行動しかしていないのでテキトーな世間話をしていた。

「それでね、実理がね・・・」

俺が作ってやったグラタンを食べながら学校で聞いたウワサ話をしている美長。ホント楽しそうだな。ここで1つ疑問があるだろう。家事は全て俺がやっていると言ったが親は・・・いない。俺の両親は俺が産まれて5年後に事故で亡くなった。新しい薬品の開発の仕事をやっていたのだが、その研究所がなぞの大爆発を起こした。爆発の原因は今もわからない。なにしろ研究所が全部ふつとんだからな。まあ今となってはどうでもいいことだ。

「ねえ、聞いてる勇人?」

「ん?ああ・・・」

「ちゃんと人の話聞きなさいよね!」

「はいはい・・・」

お前が言うことか?と思うがもちろん口に出さない。またフックをくらいたくないし・・・。

「ごちそうさま」

「ごちそうさま」

2人して食べ終わったので食器を片付ける。洗うのは・・・もちろんこの俺だ。

「おい美長、先に風呂入れ」

「はいよ」

よし。さつさと美長を風呂に入れて俺はゆっくりしよう。女の風呂は長い・・・と言うか美長は長すぎる。1時間以上なんて普通だしな。

「ふゝ、少し寝るかな・・・」

ソファで寝転び目を閉じた。

・・・それから何分かつたところに

「うきやー!」

「!?!」

な、なんだ!?!美長の声は・・・脱衣所から、か?イヤな思い出しかないがとりあえず行くか・・・

「お、おい!どうしたんだ!?!」

脱衣所の扉の前(とうぜん閉まっている)から声をかけると・・・

「ゆ、勇人ー!?!」

「!?!」

な、なんと裸の美長が飛んできた!なにごと!?!

「な、な、なんだよ!」

「む、む、・・・む」

なんだ?『む』?こいつ壊れたか?

「虫!があ!いるの!」

あゝ、虫か。こいつ大っ嫌いだったな。とその前に・・・

「おい美長、いつまで俺にだきついてんだよ・・・」

「?・・・!?!」

一瞬考え込むなよ。美長はバツと手を離し、その場にへナへナと座り込んでしまった。

「虫ってどこだよ・・・？」

「ってか女のシャンプーかなんかの香りがしてイヤなんだが・・・するとコソコソ・・・」

「？」

クモ・・・だ。しかもすごく小さい。虫ってこれか？

「・・・」

俺はパタパタとクモを逃がすように窓に追いやって外へ出す。美長はと言うと、座ってボー然としている。

「おい、もう大丈夫だぞ」

「え？・・・あ、うん」

「ってかな、あんな小さいクモなんかで大声出すなよ」

近所迷惑だろうに・・・

「大きさは関係ないでしょ！あんな、む・・・昆虫を私のお風呂に入れないですよ！」

大きさは関係ないならあんなに驚かなくていいし、虫と昆虫を言い分ける必要があったのかと思うし、そもそも俺ん家の風呂だし、とまあたくさん言いたいことはあるんだが・・・

「美長。いろいろと言いたいことはあるが2つ言う」

「な、なによ」

座ったまま美長はこっちを見上げてくる。しかも少し目が潤んでる。・・・そんな目でこっち見るな。

「1つ・・・まず服を着るかバスタオルをつけてくれないか？」

「！！！」

ガス！ ドン！ ピシヤ！

俺が殴られ 壁に激突 美長がドアを閉める音

・・・いってーな。こっちは見ないようにに必死でお前から目を反らしていたのに。

「あと1つ・・・」



「な、なによ！」

これはこれで大切だから言っておこう。

「クモは昆虫じゃないぞ？」

「今、言うことかぁー！」

バン！とドアを開き、俺に飛び掛ってくる。おい！や、やめろ！

「私はてつきり謝るとか、心配してくれるとか思ってたのにー！！」  
な、なんだこいつ！？言ってることが意味不明だ！しかもあわてて着たのかパジャマが・・・すごくきわどい感じになってるぞ！？

「お、おい！美長！」

だ、ダメだこいつ何も聞いてねえ！今、美長は小さい体を生かして倒れた俺に乗っかって叩いている状態だ。そして暴れているので・・・  
・パ、パジャマが

「美長っ！」

大声で言ってもまだ続けるので・・・仕方が無く俺を殴る美長の両手首を持ってひっくり返す。結果的に俺と美長はさっきと逆の位置になった。なってしまっていた・・・。

「あっ・・・」

そして今、俺は気付く。俺は美長の手首を押さえつけている。対する美長はもう半泣き、というか泣いている。一言で言うと俺は美長の上に乗っかって美長を床に押さえつけているのだ・・・。

「あゝ、えゝとこれはだな・・・」

なんとか弁解しようとする俺。しかし・・・

「し、死ぬ〜！」

見事に右ストレートが決まった。俺には弁解するチャンスも無いんですか？

「くっそ、いてて」

俺は気絶していたらしい。今は深夜の2時。ずっと脱衣所の前で倒れていたのだけっこう寒い。

「ソファで寝るか・・・」

今さら寝室へ行く気にもならないのでソファに向かう、が先客がいた。美長だ。

「はぁ・・・」

ため息をつきつつそばへ向かう。美長は小さく毛布に包まっていた。そして頭をなでてやると・・・

「ふにゆく・・・」

こうして見るとなんか妹みたいだな。こんな凶悪な妹はいないと思うが。そしてそのまま俺もそばに眠った。

『先祖』（後書き）

初めて投稿させていただきました。野球人です。

書くのは予想以上に難しくいろいろと試行錯誤をしました・・・。

しかし読んでくださった皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

更新は遅いと思いますがよろしく願います。

## 『苦悩の日々』

・・・みなさんこういうシチュエーションはどうだろうか？幼馴染の美少女がとなりで寝ていて、起きるなり『おはよ・・・』とかわいい声で言ってくれる。それは全国の男子が1度は望んだことのあるシチュエーションだろう。・・・しかしその幼馴染で美少女が『ハッ！』とした顔になり、鬼人のごとくボコってきてあげくのはて縄で数時間しばられたら。・・・シチュエーション不成立としか言えないだろう。と言うわけで休日朝は始まった・・・。

↳数時間後

「というわけで実理たちと遊びに行くことになったの」

「へへ、そうなんですか・・・」

「最初は家だったんだけどさすがにバレたらまずいじゃん？だから変更したの。よかったよね？」

「はい。それはもう・・・」

「やっぱり！さすが私ね！」

「さすがでございます。ところで・・・縄ほどうして」

「ヤダ」

「くっそー！！」

なんで俺がこんな目にあわなきゃなんねーんだよ！・・・理由は実のところわからん。

・朝、俺と美長は2人で目を覚ました。

・美長はソファの上、俺は下で寝ていた。

・・・この2つでなぜこんなにキレてんだこいつは！わけがわからん！

「じゃ、夕方にはもどるからね」

「あーちよ・・・縄ほどうして・・・」

ガチャリと、扉が閉まり俺はつるされたまま放置された。

なんとか縄を抜け出せたのは約5時間後・・・

「いや、あいつがいないと家も平和だなあ」

けっこう久しぶりに1人になれた俺は思わず本音を言った。その後はTVを見たりPCをいじったりと自由に過ごせた。

すると5時もまわった頃・・・1通のメールが届いた。送信者は・・・美長。

『急いでどっかに隠れて！理由は時間がないから後で！』

とのこと・・・よくわからんが必死さが伝わってくる。ひとまず言われたとおりになろう、と思い俺は押入れに入った。

その直後・・・

「へ、美長ん家始めて来たけど・・・。案外フツーね」

と、あきらかに美長とちがうセリフ。この声は・・・み、実理！？なぜあいつが！？少し戸を開け外を伺う。

「あ、ごめん美長。いきなり・・・」

「う、ううん。全然いいよ！」

あはは・・・と苦笑いしている美長。なんもよくねーよ。こっちはそのせいで狭くて暗い押入れに入ってるんだからな。

「じゃ、ちよっとお風呂借りるね」

と言って実理は風呂へ言ったようだ。なぜ人の家で風呂？と思いつつ一回押し入れから出ようとしたら・・・

「み、美長!？」

実理の驚いた叫び。あわてて出しかけた体を押し入れに戻す。

「な、なに!？」

脱衣所での会話を聞くことにした。

「あなたって確か・・・1人暮らしよね？」

「う、うんそうだけど・・・」

あいつ、隠し事とか苦手だから大丈夫かな・・・？

「な、なんで男物の下着があるわけ・・・？」

「!?!?」

し・・・しまった！洗濯物を干しっぱなしだった！これは最初からやばいぞ！と思っっていると・・・

「そ、それは・・・」

なんとかごまかそうとする美長。

「それは・・・？」

それは・・・？

「しゅ、しゅみ、そう！私の趣味！」

「!?!?!?」

もう一度言う。美長は隠し事が苦手だ。ってあいつテンパってわけわからんことを言い始めたぞ!?

なんだよ男物の下着を集めるのが趣味な女子って、ありえんだろ。

なんとかかさっきのピンチを切り抜けた美長は今だ微妙な顔をしている実理と一緒にリビングへ来た。

しばらくは平和に女子同士でしゃべっていた。するとやはり女子、ガールズトークの定番。恋愛の話をしだした。俺はこういうのは苦手だし、盗み聞きしてるみたいでイヤなのでなるべく聞かないようにした。しばらくそうして押入れの中になるとなにやら話しのネタでハイテンションになってきた実理がこんなことを言い出した。

「そっういえば美長、あんた身長あんまり伸びないね」

「うん・・・、なんでだろ・・・」

実理も高いほうではないが美長よりは高い。すると・・・

「胸も成長しないね」

なんて会話だよ

「う、うるさい！私は・・・人より少し成長スピードが遅いのよ！」  
またイヤな会話をし出したな・・・と思っっていると。

「っりゃー！」

「ひゃわ!」

な、なんといきなり実理が美長の胸をさわりだした!女子同士のコミュニケーションと聞いたことがあったが・・・ホントだったとは(??)

「ちよ、ちよつとやめてよ!」

「いいじゃんか、女同士なんだし」

いやらしく笑う実理。手つきが女っぽいぞ・・・。と想像したら後ずさった美長は押入れ(俺の隠れ場所)の方に来た。っていうか、つっこんできた。おい、まさかこれってやばいんじゃないか・・・

「ひゃ!」

「美長!?!」

グシャつと押入れの扉が壊れ・・・

「・・・勇人?」

「・・・こんばんは」

バレちゃったよ・・・

『苦悩の日々』（後書き）

野球人です。更新はとてもバラバラで1日に何回か更新することもあるかもしれませんが、申し訳ありません。

この『偉人パラダイス』はまだまだ続くのでよろしくおねがいします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3301z/>

---

偉人パラダイス

2011年12月11日15時47分発行